

華ヤカ哉、
 我ガ一輪、
 上巻
 御杜守



典特版定限

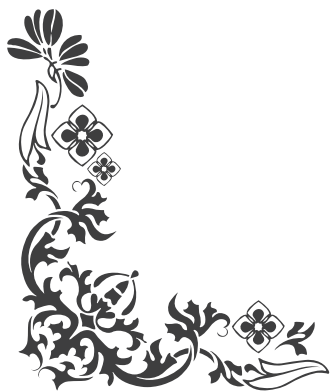


華ヤカ哉、我が一族

サンプル

上巻

御杜守



目次

序章	05
第壹章	母との過去 <small>おもひで</small>	06
第貳章	距離.....	12
第参章	無天流.....	17
第四章	帝都將軍と刀.....	22



序章

帝都の中心で光り輝く一族があった。

それは一代で築き上げられた財の上に成り立ち、酷く脆い土台に見えながらも実の所非常に頑丈であり、どんな災害にも揺るがない。

我輩はその一族をいつしかこう呼ぶ様になった。

——華やかな一族、と。

華やかな一族は自らも光を放ち、この暗き帝都を照らしている様に見えた。闇夜に点る光、そこに群がる者の姿は、醜き蛾の様にも見え、時には甘き蜜に群がる蝶の様にも見える。

一族の長は幼き頃より貧しく、親の営みし店を乗っ取るや否や見切りを付けてそれを捨てた。捨てたのは店だけではない。生まれ育った家、そして自分を育てた親も捨てた。彼の中には現在と未来のみ。

過去を斬り捨てる事で道を作り、ついには帝國の名だたる財閥の長となる。

己のことしか考えず、子も妻も親さえも他人と扱うことが出来る者はそう多くはない。大体は罪を犯している者だろう。だが稀に、罪を隠しのうのと生活出来る者がいる。

世渡り上手と謂ってしまえばそれまでだ。

割り切っているだけと謂えばそれまでだろう。

金で罪をもみ消せる財がある者なら容易いかもしれない。

目的の為の手段として見切りを付けている点で、利用出来る者はとことん利用し、逆に利用出来ないと思えば、まるで腐った食材のように捨てる。不利益を被ると知れば捨てるだけに留まらない——

これらのことを華やかな一族の長はやつてのける。それは、財があり強運があるだけではなく、自らの野望を達成させるための覚悟と決意が人並み外れているからだ。

我輩も決意と覚悟なら持ち合わせている。それについては後々綴ってゆくことにしよう。

この物語の登場人物は偽名だが、どう受け止めるかは読み手の判断に委ねるものとする。



第七章 母との過去おちりで

帝都から汽車に乗り、流れる景色が畑と山だけになった頃、我輩が住む村が見えてくる。数えるほどの住人しかおらず、住人が外が最寄り駅に降り立とうものなら村中で噂になるだろう。

我輩が住む場所は寺の住職から借り受けた小屋で、人里から離れた山奥にあった。小鳥の囀りに川のせせらぎ、獣たちの鳴き声……我輩以外に人と呼べる者はおらず、何もかも自分一人でせねばならない。帝都を離れたこの土地で暮らし始めて既に弐年になる。

我輩は幼き頃から母に育てられた。母は妾だったので結婚することもなく、我輩を身籠もっても母以外の誰にも歓迎されることもなかった。

——我輩は生まれてはならなかった存在。

しかし我輩自身も母も、生まれなかった方が良かったなどと微塵も思つたことはない。また母を妾にしていた男にとつても我輩は必要な存在なのだ。

ゆえに生まれてはならなかった。

相手が普通の男なら、普通の家庭を築き普通の人生を送れていたのかもしれない。母も病に臥すこともなかったのかもしれない。

しかし男は普通ではなかった。

全ては母と男の出会いが始まりであった。

母の惚れた男であればと理解しようとする時期もあるが、我輩の決意がそんな気持ちなどすぐにかき消した。

父は帝國の名だたる財閥の長、宮村栄一郎。

親も妻も子も全て手駒となり、目的の為に使い、用が無くなれば捨てていた。

母は恐れたのだ。我輩が栄一郎の使い捨ての駒になることを。

我輩を身籠もってもそれまで勤めていた住み込みの工場勤めを続けたが、幼子と一緒に追いついてしまふ路頭に迷ふことになる。その時帝都で、或る老婆と出会う。その老婆の紹介で母は食堂に勤めることが出来た。老婆が住む二階建てのアパートの一角を借り、我輩と母は移り住むことになった。

女が一人働きながら幼子を養うのは容易いことではない。ゆえにこの時出会った老婆は母にとって大層心強い存在となった。我輩の父親が父親だけに母方の実家を頼るわけにもいかず、我輩の出生は内密とされた。

身を隠すような生活をしながらも我輩は小学校へ進むことが出来、多少ばかりの教養を身に付けることが出来た。

或る日我輩は母に訊ねる。父親はどういう方なのかと。すると母は変わった方だがお寂しい方なのだと言った。何故かええないの

かと訊ねる。すると母は身分が高くお忙しい方だから無理だと答えた。生まれてはならなかった子なのかと訊ねる。すると母は我輩を叩いた。

我輩は訳が分からずに泣いたが、その後黙って抱きしめてくれた温もりにより、我輩は生を受けるべくして受けたのだと理解することが出来た。

そして母が一通の手紙を見せ、その差出人が父親だと教えてくれた。そこに書かれてあった名を見て一瞬身体が凍り付く。小学校に通う我輩でも知る名だ。何故こんな暮らしをせねばならないのかという疑問が、我輩の中で日々益々大きくなっていった。



朝学校に行く時間には、既に母は食堂勤めを開始していた。我輩は作り置きされた朝食を食べると、弁当箱に手当たり次第に残り物を詰め込む。飯のない時もあれば弁当箱に詰めるものがない時もあった。

学校から戻っても母はまだ勤め先にいる。夕食の時間になったら母のいる食堂に行き、食事を摂ることを常としていた。食堂の店主は口数こそ少ないが面倒見のいい人で、喧嘩をして頬を腫らしていた時も黙って手当てをしてくれた。

忙しそうに動き回る母を見ながら食べるのが好きだった。母は決して大人しい性分ではないので我慢することも多々あっただろう。慣れない仕事をしていた為か接客も上手とは謂えなかった。

我輩の目の前で何度も失敗していたがそれも最初の内だけで、次第に母を目当てに通う客が増えたという。無論母を女として無理矢理迫る輩もいた。当時の我輩では太刀打ち出来ず、悔しい思いをしたこともあった。その度に店主が入り事なきを得ていた。我輩も母も食堂の店主と大家には誠、感謝している。

或る日の夜、食堂から母と歩く帰り路。我輩はもつと楽な暮らしが出来るのに何故宮村家を頼らないのかと話したことがあった。すると母は足を止めて強ばる顔を我輩に向ける。その顔を見ただけで謂ってはならぬことを謂ったと分かった。「二度とその名を口にしてはならない」、その時母に謂われた言葉だ。もし再びその名を謂えばあの家を出なければならぬし、もつと貧しい暮らしをしなければならぬと謂われ、二度と口にしなないと約束した。

家に戻ると母は我輩を呼びつけ正面に座らせる。そして静かに語り始めた。



母がまだ女工をしていた時のことだ。周りは縁談の話が来たただの結婚が決まったのだという話題で持ちきりとなる年頃だ。今でもそう変わりはないが、貧しい家で育った者なら若くして嫁ぐことが親孝行とされ、親の方も少しでも家柄の良い家に嫁がせたい為、どこも挙つて良縁を探していた。

「敷入りになると実家に帰るでしょう？ その度に女工が減っていったのよ。女工として働き続けるより嫁いだ方が家の為になるから、皆結婚させられていたわ」

母にとって結婚は自分の人生を決められてしまうことだと考えていたようで、結婚そのものに違和感があったらしい。

「もちろんいつかは結婚しなきゃならないって分かっていたわよ？ けれど……そうねえ、あの頃の母さんは自分の生きたいように生きたかったかもしれないわね」

そう謂ってあかぎればかりの手を揉みながら微笑む。僅かに差し込む月明かりが優しく母を照らした。いつの間にかこんなに老けたのだろうかと思つたが、言葉を呑み込んだ。

「……十七歳ぐらいたったかしら。その年の敷入りに一人で銀座に遊びに行ったのよ。仕送りはもちろんしていたけれど、少しずつお金を貯めてね。生まれて初めての帝都、初めての銀座に心躍ったわ」

「じゃあ……その時に会つたの？」

「ええ。銀座で会うのは二度目だったの。最初は工場の近くで二度目が銀座よ。話し掛けられたけど無視。名乗られても無視したわ。だって興味がなかったんですもの。その時の母さん、男より銀座に夢中でね」

くすくすと少女のように笑う母。さぞ可笑しな娘と思われただろう。

当時の宮村栄一郎は繊維工場や貿易に手を出し始めていた頃だ。政界への足場を固めつつあった頃でもある。地方の田舎町で十七の娘と出会い、その後偶然に銀座で再会しても普通なら声を掛けない。だが違つたということは、それだけ向こうにとって母は印象深い娘だったのだろう。

色恋で謂えばこれを縁と捉えるが、どうやら母は違つたようだ。

「見ず知らずの娘に食事をご馳走してくれて、宿の世話までしてくれたの。食事はご馳走になつたけど宿は断つたわ。田舎から出てきた小娘でもそれぐらひは分かるのよ、下心があるんじゃないかって」

「下心？」

「あなたはまだ分からなくていいの。とにかく豪華な食事を済ませた後は、一人で気ままに観光を続けることにしたのよ。けれど田舎と違つて銀座って値が張るでしょう？ あつという間に持ち合わせが無くなつちやうって結局野宿することにしたのよ」

「母さんが銀座で野宿？ 何だか信じられないなあ……」

「母さんだって信じられないわよ。若いって怖いわねえ……でね、起きたらあの人がいたの。危ないから見張らせていたんですって」

危なっかしい娘を放っておけなかった、それだけのことだろう。しかしそこから先の展開が常人ではなかった。

「その後いきなり四番目の妻になる気はないか、って謂ってきたの。もちろん断ったわ。相手のことも分らないし、出会ったばかりでしょう？ そんな状態で結婚は出来ないもの」

今でこそ恋愛結婚は出来るようになってきたが、母の若い頃なら難しかっただろう。だが今のところ話を聞いている限り、母が栄一郎に惚れる要素はなさそうだ。

「向こうは諦めた？」

「ううん。しつこく迫ってきたわ。だから観念したのよ。お互いが好きになったら結婚しましょう、って。だって相手を好きになっただけで結婚したかったんだもの、だからまずあの人を知る必要があったし……こう謂い並べてみると、変な謂い方よね。とにかく、その日以来会う機会が沢山増えて、気付いたらお互い好きになっていたのよ」

「……結婚したいと思ったの？」

「ええ、母さんもあの人もね。ただ……」

そこで言葉は途切れ、遠い目をして外を眺める。我輩もその後の展開は知っているので敢えて聞かないことにした。

相手が悪かったと謂えばそれまでだろう。身分差があるのに一緒にしろとうとしたからだ、と謂えばそれまでだったのかもしれない。我輩の存在が二人を引き裂いたのかもしれない。

いずれにせよ母から聞いた父の話はそれ以降しばらく無かった。



続きは

『華ヤカ哉、我ガ一族 モダンノスタルジィ for Nintendo Switch』
限定版小説小冊子にてお楽しみください。

